

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

遠藤理一

【所属】(助成決定時)

西武文理大学サービス経営学部

【研究題目】

異文化コミュニケーションの主体としての中国人旅行者

【研究の目的】(400字程度)

2010年代日本においてインバウンド・ツーリズムが隆盛する中で、アジアからの観光客は経済活動の主体として描かれることが多く、文化的主体としては、地域社会との摩擦を引き起こす「規範破り」の主体としての取り上げられ方がほとんどであった。しかし観光が異文化理解に資することを認めるためには、観光者に地域社会への理解を求めるだけでなく、観光者に対する安易なステレオタイプ化を避け、その思考や行動を理解しようと努めることが必要となるだろう。そこで本研究では観光者自身による旅行経験の語りを取り上げることで、観光者の地域社会とのコミュニケーションのあり様を明らかにすることを研究目的とした。とくに観光客をめぐる上述のナラティブがある状況をふまえ、観光者による「規範」をめぐる語りを収集・分析することで、観光者が地域の文化やマナーをどのように認識し行動しているのかを検討した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

事例として、ブローグ一件あたりの文字数や記述の詳細さを特徴として挙げられる、中国人旅行者向けの旅行ウェブ・プラットフォーム、马蜂窝に投稿された日本旅行記を取り上げた。観光学専攻・中国語ネイティブの博士課程の大学院生2名(2021年度時点)の協力のもと、马蜂窝の日本旅行記44件を選択し、その文章から観光地や旅程についての一般的記述を取り除き、地域社会との関わりについての記述を抽出した。

調査の結果、44件のブローグのうち28件のブローグの48か所に規範に関する記述がみられた。それらについて、規範に関する社会的視点を援用し、規範の性質により①「明示されたもの」と「暗黙のもの」、②「観光行動一般にいえるもの」と「その場限りのもの」、③旅行者が「地域社会の法や習慣を尊重するもの」と旅行者が「地域社会に対してツーリストの求める価値の尊重を求めるもの」、④「規範遵守」と「規範破り」という形での規範とカテゴリー化し二次的なコーディングを行った。

分析結果として、まず自らや同行者による「規範破り」についての記述は48件中5件(主に、祇園・花見小路など写真撮影禁止エリアに関するもの)であった。しかしいずれも、その行為が規範破りであることへの自覚や罪悪感、同行者の規範破りに対する非難の心情を添えた書き方となっており、単に「規範破り」の主体とはいえない複雑性がみられた。第二に48件中25件にみられたその場における暗黙の規範(寺社での声の大きさ、エレベーターの立ち位置など)についての記述からは、明示されていないルールをも意識する観光者の姿が浮かび上がった。第三にブローグを通じて明示的・暗黙的な規範、誤解された規範、あるいは規範に対する批判(規範が不必要に厳しいことについてなど)について記述・拡散することにより、規範に一定の作用を及ぼしながらそれを構築する主体としての観光者の姿が浮かび上がった。

【結論・考察】(400字程度)

本研究では旅行者自身の語りという一次資料から観光者の経験を探ることにより、彼らが地域社会との関わりを求め、地域社会のルールやまなざしを気にするといった、オーバーツーリズムが問題視される中でステレオタイプ化された「観光客像」とは異なる立体的な観光者のあり様を明らかにした。観光者を「規範破りの人々」

と捉えてしまうことは、少数の事例を強調した見方であり、観光者と規範との複雑な関わりについての理解を大きく狭めてしまうものである。むしろ本研究が明らかにしたのは、誤解や過度な強調も含み込みながら旅行先の社会に関わる「規範」を構築する主体としての観光者の姿である。

一方、本研究はこうした姿を旅行ブログから探したが、実際の観光経験と旅行ブログに執筆された記事の間の違いについてはより慎重な検討が必要だと考えられる。今後は旅行ブログにおけるマナーについての語りに関するメディア論的検討も視野に入れ議論を進めたい。